

イエスの活動はヨルダン川での洗礼に始まり、ガリラヤ周辺での公の宣教活動で展開していきま  
す。ガリラヤ湖の漁師たちが弟子として召され、そこから全ガリラヤに福音が宣べ伝えられていく  
(1章39節)のですが、ファリサイ派の人々が早くもイエスを殺そうと企むと、イエスは『弟子  
たちと共に湖の方へ立ち去られた』(3章7節)のです。しかし、ガリラヤ湖畔では、ガリラヤ地  
方だけでなく、イエスのしておられることを聞きつけたおびただしい群衆が隣接地方から集まって  
くるのです。そこで、イエスはこのあたりから弟子たちへの教育に関心を向けていき、そのために  
いろいろと心を砕きます。しかし、弟子たちの無理解がずっと続いていのです。それはイエスの十  
字架まで続きます。

今日のテキストでイエスは、押し寄せてくる群衆に疲れ果てて、群衆から離れて弟子たちと一緒  
に舟に乗って対岸に行こうと漕ぎ出します。舟に乗ると、イエスは疲れたのか船尾である艫(とも)  
で枕して深く眠ってしまうのです。ところが、このガリラヤ湖は北ないし北東から吹きおろす突風  
が、しばしば嵐を巻き起こすところです。ガリラヤ湖は日本で言えば琵琶湖と同じくらいの大きさ  
で、南北21キロ、東西は狭いところで12キロの大きさの淡水湖です。水深はさほど深くなくて  
50m未満です。しかし、水深が浅いために、通常は水温が15度ぐらいなのが、夏の暑いときに  
は24度ぐらいまで急上昇し、それが原因で突風を巻き起こすのです。また、ガリラヤ湖は海面下  
200mと低い場所にあるため、暑くなると、太陽が湖水の上空の空気を熱くして、湖水の空気が  
上に向かって行くため、希薄になります。すると、そこに湖の両脇の斜面から突風が吹きつけてく  
るのです。特に夕方は冷却した風が吹き降ろしてくるのです。並行記事のルカ福音書ではそのあた  
りのことを知っているのです、8章23節では『突風が湖に吹き降ろして来た』という的確な表現に  
なっています。マルコ福音書は単純に『激しい突風が起こる』(37節)と表現しているのとは対  
照的です。つまり、ガリラヤ湖の漁師たちは経験的に、そのような気象条件にあるガリラヤ湖を熟  
知していたはずです。

35節でイエスが向こう岸に行こうと言われたとき、漁師上がりの弟子たちは躊躇したはずで  
並行記事のマタイ福音書では向こう岸に行くことがイエスの主導で行われていることを明らかに  
するため、『(イエスは)弟子たちに向こう岸に行くように命じられた』(8章18節)とあり、弟子  
たちがその命令に従ったことが描かれています。いずれにせよ、長年ガリラヤ湖で漁師として働い  
てきた弟子たちは、その日、夕方になってきたときに船出することの危険性を熟知していたのです。  
しかし、イエスはそのような弟子たちの不安をよそに出立するのです。おそらく、弟子たちは突風  
が吹き降ろしてくることに尻込みをしたのではないか。しかし、弟子たちの心配をよそにイエスは  
船に乗り込むと艫(とも)の方で眠りこんでしまったのです。これはある意味、イエスの人間的な  
弱さを表わしているのかもしれない。もちろん、この深い眠りが神に対する深い信頼の現れとも  
理解することができます。また、弟子たちは不安を抱きつつも、主イエスが向こう岸へ行こうと言  
われたことに信頼を寄せていたのかもしれない。しかし、最終的にイエスに対する弟子たちの信  
頼は欠如していたのです。

さて、激しい突風が起こり、舟は波をかぶり水浸しになるほどであったのです。この個所を原文  
のニュアンスをくみ取って訳すると「たくさんの波が舟に向かって捕えにきて、今やすでに舟は波

に満たされるほどであった」という状態です。しかし、イエスだけは眠り続けていたのです。おそらく舟の後方にある客用の座席で、そこにあった枕かなにかを頭にあてて眠っていたのでしよう。もしかしたら、艫には舵（かじ）もあるので、イエスの深い眠りは弟子たちの運命をイエスが握っていることを象徴しているのかもしれませんが。そのとき、弟子たちは『先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか』（38節）という言葉を吐いたのでした。直訳では「私たちが滅びても意に介さないのでですか」です。ですから、漁師としての経験豊富な弟子たちさえも滅びを感じるほどの恐怖を抱かせる嵐が襲ったのです。そこでイエスは目を覚まして悪霊を叱ったときと同じように、風を叱ります。ここでの『黙れ』は、口輪（くちわ）をかけるという意味で、それで風はやんでしまうのでした。そして、すっかり風（なぎ）になったのです。直訳では「大きな静けさになった」のでした。このようにマルコ福音書での突風を鎮める物語は擬人化されていて、イエスのたった一言で突風さえもが鎮まるのです。

さて、突風が鎮まると、イエスは弟子たちの信仰を問題にします。これも当時の教会で迫害の嵐の中に存立している教会の状況を反映しています。当時の教会はネロ皇帝の迫害のなかで、ペトロやパウロは既に死に、教会にとつてはたいへん心細い状況下にありました。ですから、教会の信仰者たちの狼狽に対するイエスの叱責は、当時の教会人が自分たちの信仰に何が欠如しているかを想起させたはずです。『なぜ怖がるのか。まだ信じないのか』（40節）という言葉は、当時の信仰者に対して信仰の力を問うている言葉でもあるのです。それは何かと言えば、突風を鎮める「イエスの力」に対する信頼です。テキストでは弟子たちはイエスとは一体どういうお方なのかを継続的にずつと言いついていたというニュアンスを示しています。そのことは福音書を読んでいる現代の私たちも、同じ問いの前に立たされているのです。このイエスの問いによれば、私たちは自分の存在をイエスの力、神の力に結びついていたものとして自覚することが求められています。絶望しているとき、苦難に出会っているとき、私たちは実は神の力に支えられているという自覚が求められているのです。

では、神の力に対する信頼はどこから生まれるのでしょうか。それはイエス・キリストの出来事において成就していることを信じることです。嵐の中の舟というのは、教会における交わりを示しているとも言えます。また、私たち信仰者の一人一人が背負っている人生と言うこともできるでしょう。舟は、波に翻弄される私たちの人生を象徴しています。ですから、私たちは嵐のような出来事に直面すると、自分が強くなって、揺らがない人生を歩まなければならないと考えがちです。しかし、そのような生き方は等身大の自分ではなく、より強い自分を演出しなければならず、いずれは破綻します。自分自身を強くする方向で嵐に立ち向かうのではなく、イエスの力にしつかりと結びついていることが肝要なのです。

おそらく、初代教会ではイエスの癒しと慰めを信じて教会に連なった人たちが、迫害の中でイエスの力が信じられなくなった人も出現したのでしよう。イエスに従う信頼と信仰をもって教会という舟に乗り込んだものの、いったん迫害や教会内に亀裂が生じると、教会を去る者たちがいたので。本日のテキストのように、キリストは眠っているように感じてしまうことも起こってきたのです。しかし、イエスは教会に集う者一人一人と結びついていることをこの物語は象徴的に表しています。どのような嵐の中でも、イエスは常に教会という舟の中に弟子たちと一緒に乗り込んでおられることをこの物語は示しているのです。そして、嵐はイエスのたった一言の叱責で鎮まる希望が語られているのです。なぜなら、たとえ弟子たちがイエスのことを本当に理解していなくても、イエスは弟子たちを見棄てはしないからです。